

下北地方最高峰・釜臥山(むつ市、標高878m)の頂上や展望台からは、地球の働きによって生まれた半島の「まさかり」形が眼下に広がる。下北ジオパーク推進協議会が、日本ジオパーク委員会の現地調査を迎え入れるスタートに選んだのが、この釜臥山。調査員に、下北ジオの全体像を

# 「まさかり」の地力

— 下北ジオパーク再認定審査

⑤

示す狙いがあった。「釜臥山に立つと、島弧(弧の形で連なる列島)の大きさや、地球の活動のスケールが体感できる。日本でなかなかないくらい、すごい場所」。興奮気味に語るのは、海洋研究開発機構(海洋機構)むつ研究所の

## 研究

# 弘大参画 知見積み上げ

田中武男研究所長。海洋機構は、推進協と研究などのできる。



釜臥山展望台からの下北半島の眺望。写真左側が北—10月27日

下北半島は、日本列島を形成する主要な四つの地質が全て集まっている。下北ジオの「売り」でもある。

一方、下北がフィールドの研究実績は少なく、未解明な部分も多い。知見の積み上げを図るため、推進協は2020年度から5カ年計画で、弘前大学との共同研究を始めた。

弘大は、理工学部地球環境防災学科の折橋裕二教授、梅田浩司教授、根本直樹講師の3人が参加し、同科岩石鉱物学グループの大学院生・学生が研究に加わっている。20年度はカルデラ形成を伴う大規模噴火、マグマ活動による現象が研究テーマ。複数回下北入りし、地質調査や岩石試料の採取を行った。盛合秀さん(学科4年)、佐々木明伸さん(同)は、卒業研究のテーマとして取り組んでいる。研究グループは「下北に数多くの景勝地があるの

## 「世界」目標に 価値探る

は、1億5千万年にわたる大地の変動と地質現象の結果。研究を深めることで、地元の皆さんの好奇心に私たちが応えられるようになる。豊かな自然に付加価値を与え、観光資源として恩恵をもたらす可能性を秘めている」と意義を強調する。

田中研究所長も「東北日本の形成や島弧の仕組みを語る上で、下北半島が非常に重要な場所だと示せるようになるだろう」と研究の進展に期待する。

下北ジオは将来的な目標として、国連教育科学文化機関(ユネスコ)世界ジオパーク認定を掲げる。今後焦点となるのは、下北ジオの「国際的価値」を見いだせるかどうか。弘大のグループは「研究を継続し、魅力を引き出し続けることができれば、世界ジオ認定も、結果的にいついてくるだろう」と考えている。

下北ジオの積み重ねた4年間を、日本ジオ委はどのように評価するか。結果発表は21年2月の予定だ。

「終わり」(この連載は、工藤洋平が担当しました)

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]弘前大学理工学研究科

E-mail:r\_koho@hirosaki-u.ac.jp